読売歌壇

小池　光　選

深爪の足の小指より鮮血の吹き出づるなほ生きよといふか　市川市　安田　恭子

【評】いくつになっても体内をめぐる血液は真っ赤である。苦労して切る足の爪、思わず肉まで切った。ほとばしる鮮血。「なほ生きよといふか」が強く、迫力ある。

落書きに昔懐かし絵をみたり「へのへのもへじ」は生きていたのだ　横浜市　芳垣　光男

【評】誰が描いたんだろう、へのへのもへじの落書き。今の世になって、こんな落書きを見ようとは思わなかった。懐かしい。思わず立ち止まって見てしまう。

三週ぶりに蛇口の水を飲む人の涙の笑顔がまぶたに焼きつく　秩父市　高橋　秀文

【評】能登大地震の歌がたくさん寄せられた。三週間ぶりに水道が復旧。蛇口から水を飲む人の「涙の笑顔」に思わずはっとする。

北陸の手伝い何も出来ぬ我お笑い番組見るのを止める　座間市　阿部　正信

終わったと洗濯機鳴り開いてると冷蔵庫鳴る音は友達　つくば市　岩瀬　悦子

休日の子供のいない学校にチャイム響きて雪だるま笑む　宮城県　松本美由紀

「かつてないおいしさ」とある猫餌の試食は誰がしたのだろうか　鎌倉市　畠山　翠子

幼児のように湯船に揺れていた惚けし母の歳に近付く　東京都　影山　博

とくに何もやましいことはないけれどマスクでほくろを隠して生きる　千葉市　佐藤　綾子

ただいまと庭のお花に声かける　シンビジウムがお帰りなさい　千葉市　福岡　初代

栗木　京子　選

「合格はぼくとみんなに」と書かれゐる湯島天神の絵馬のひとつに　入間市　古屋　冴子

【評】合格祈願の絵馬。受験は競争の場ではあるが、努力した人たちはみんな報われてほしい。そんなやさしい願いに心があたたかくなる。湯島天神の梅もきっと見頃であろう。

ジャンケンで勝ち残るなんてラッキーね「グローブ」最初に使える孫は　東京都　堤　美枝子

【評】大谷翔平選手が日本全国の小学校に贈ったグローブ。作者の孫は校内で最初に使うことのできる栄誉を獲得した。強運の持ち主である。「ラッキーね」が弾んでいる。

読みかけの本から栞を抜くようにLINE一つで終わる恋愛　狛江市　雪本　圭吾

【評】作者は中学生。バレンタインデーに寄せて詠んだ一首だという。LINEは便利だが残酷でもある。上句の比喩がじつに的確。

三日目の土に汚れた雪だるまこわせと長男だめだと二男　宇都宮市　津布久　勇

表情はやさしいけれど拒否は拒否虹の橋とは渡れない橋　宮津市　野ばら

銀山の温泉宿に降る雪は明治時代の温もりがある　山形市　柏屋　敏秋

雪止みて星々いっそう輝けりオルゴールで聞く「星に願いを」　富岡市　宮前　咲恵

同い年の英国王のがん治療テレビ画面にエールを送る　町田市　三沢　康正

ため池は今も遊び場　農業を継がざりし友と寒鮒を釣る　静岡市　柴田　和彦

カワセミが子育て中の桂川カメラ持参の若者あまた　京都市　観山　哲州

俵　万智　選

方言で喋ってみてよ東京の言葉で綺麗に笑われた春　小金井市　中島　遥

【評】地方から東京へ転校した場面だろうか。ただ方言が珍しいという意味ではないだろう。「綺麗に笑」うという表現に、相手の意地の悪さや自分の悔しさや方言への引け目など、複雑な感情が渦巻いている。

クロッカスもうじき咲くか子の部屋に「地球の歩き方」置いてあり　船橋市　矢島　佳奈

【評】直接の関係はないのだが、取り合わせの妙で、クロッカスと子どもの成長が重なって感じられる。部屋を出て海外へ旅する日も、遠くなさそうだ。

地を蹴るやうに写真をスクロールすれば流るるとりどりの色　八王子市　土屋ひろ菜

【評】上の句の比喩がみごと。早く見たくて前のめりになっている指先が、目に浮かぶ。

ほぼ水のからだにきみの手がふれてわたしの内にひろがる波紋　上尾市　関根　裕治

赤本の頭上になびく付箋紙を刈り取り冬を終わらせていく　川崎市　全　美

マフラーの巻き方は風に教わったみたいなきみの変な結び目　大和郡山市　大津　穂波

原生林のざわめきだけの感情で新しい本棚を作った　川崎市　からすまぁ

うけうりの言葉ばかりを詰め合わせ自論のように渡される箱　埼玉県　玖嶋さくら

たのしいがたのしかったに変わるころ筋肉痛のようにさみしい　東京都　原田　葉

路地裏にただ居るだけの猫がいてただ居るだけが出来ない私　守口市　小杉なんぎん

黒瀬　珂瀾　選

カツ丼にときめく九十はカー押して「梅久」に行く梅花見ながら　小美玉市　松山　光

【評】「梅久」は地元のお店でしょう。カツ丼が名物なのかな。それを楽しみにしっかりと自分の足で歩む九十翁。人の生きる姿をさりげなく見せてくれる一首。地元だけで通じる固有名詞を詠み込んだ点がユニークです。

防災の本を三冊買ひ求めお釣りを募金箱へと入れる　村上市　鈴木　正芳

【評】作者の住む新潟県村上市にも今回の能登半島地震の被害が及んだと聞く。市民一人ひとりの防災意識と連帯の心が大切なのだということを、改めて意識させてくれる歌。

善逸の雀の柄のTシャツよ春一番に吹かれいづこへ　調布市　菊川　直樹

【評】キャラTが飛んで行った、と。霹靂一閃を放って鬼を切りに行ったのでしょうか。

四十まで求人欄を日々見てたあの頃荒野に残されたようで　筑紫野市　桂　仁徳

スタックせる我のタイヤを掘り出してシャベル担いで勇者は去りぬ　松江市　犬山　純子

パーティーの客をもてなし現金は勝手口より何処へ行くのか　丸亀市　服部　芳郎

電子にて言葉とびかう世となりて手紙は瀕死の白鳥のよう　豊橋市　坂部　さち

九度目の十両昇進力士の記事何度も読みぬうなずきながら　草加市　新井美智子

年一度の「生存証明書」を送る企業年金しかと貰はむ　前橋市　近藤　周雄

つれあいを許して髪を撫でてやる母子の縁薄かりし連れあい　松江市　三方　純子

次回は19日(火)掲載予定

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから。右の影絵はもんしろちょう